

パイレーツ・オブ・カリビアン ワールド・エンド

2007(平成19)年5月26日鑑賞(梅田ピカデリー)

★★★★



第1章

シリーズ物がいっぱい

監督＝ゴア・ヴァービンスキー／製作＝ジェリー・ブラッケイマー／脚本＝テッド・エリオット、テリー・ロッシオ／出演＝ジョニー・デップ／オーランド・ブルーム／キアラ・ナイトレイ／チョウ・ユンファ／ジェフリー・ラッシュ／ナオミ・ハリス／ビル・ナイ／ステラン・スカルスゲールド／ジャック・ダヴェンポート／ジョナサン・プライス／トム・ホランダー／ケヴィン・R.マクナリー／リー・アレンバーグ／マッケンジー・クルック (ブエナビスタ インターナショナル (ジャパン) 配給／2007年アメリカ映画／169分)

……この人気シリーズは真夏の公開が最も似合うが、第3作はそれを待ちきれずに大公開！ 第2作で死んでしまったはずのジャック船長の再登場は……？ エリザベスと結ばれるのはダレ……？ ウィルは海賊として生きていくことに……？ 「世界の果て」には一体何が待っているの……？ 新たにアジアの海賊を加えながらも、完結編らしく大活劇を楽しみながら、すべての登場人物がそれなりの結末を迎えていくことに……。しかし、映画人は平気で人を騙すもの……？ 第3作＝完結編はひょっとして真っ赤なウソかも……？

遂に「完結編」だが……

遂に『パイレーツ・オブ・カリビアン』3部作の完結編が公開！ といっても、実はこの第3作は第2作と同時に撮影され、第2作が公開された2006年7月には第3作の公開が2007年5月と決定されていたもの。こりゃまるで、現在『SHOW - HEY シネマルーム』13、14の2冊を同時製作中の私が、発売日をどのように設定するかという構想を練っているのと同じような戦略……？

もっともパンフレットを読むと、第2作の公開後、2006年末に大雨の中での格闘シーンの後半を追加撮影したとのことだから、その調整はいろいろと大変だったよう……。第2作・第3作は200日間ロケという異例の長期撮影の中で撮影されたことや、そのストーリーの完結性を見ると、たしかにこの『パイレーツ・オブ・カリビアン』

という人気シリーズもいよいよこの第3作で完結、すなわちザ・ファイナル……？
しかし、いや待てよ……？

今年5月1日に世界同時公開された『スパイダーマン3』(07年)は、興行収入100億円を売り上げようかという勢いらしい。すると、柳の下のどじょうは2匹よりも3匹、3匹よりも4匹と願うのは関係者の常。ましてや、このシリーズは名うての名プロデューサー、ジェリー・ブラッカイマーによるもの……。

『ロッキー』シリーズは、今年4月に公開された第6作が正真正銘の「ザ・ファイナル」となったが、さてこの『パイレーツ・オブ・カリビアン』シリーズは……？

第1作は？ 第2作は？ そして第3作は？

『SHOW-HEY シネマルーム』は2002年6月の「パート1」を皮切りに、2007年5月現在「パート12」に到達した。したがって、『パイレーツ・オブ・カリビアン』第1作は『シネマルーム3』の101頁に、第2作は『シネマルーム11』の20頁に収められている。今それをあらためて読んでみると、「1枚の金貨をめぐる痛快活劇」だった第1作は、「2時間23分の間、決してあきらめず、冒険とアクションを楽しむことができる」と絶賛しているし、「デッドマンズ・チェスト」を統一テーマとした第2作は、「3人の主役の成長と活躍に注目！」と書いているが、その評価は両者とも最高点の星5つ。こういうシリーズもののパンフレットには必ず「前作までのあらすじ」が紹介されているが、私の場合はそれを読まなくても『シネマルーム』の評論を読めば十分。こんな状況になると、やはり「書くことの意義」を再確認……。

第3作は、第1作の2時間23分、第2作の2時間30分を超える2時間49分の長丁場になっているが、次から次へとくり出されてくる物語に、決して時間の長さを感じることはないはず。そして、第2作までは謎に包まれていたヴェドゥー教の予言者のおばさん(?)ティア・ダルマ(ナオミ・ハリス)、今やそのタコ面がすっかり名物となった(?)“深海の悪霊”デイヴィ・ジョーンズ(ビル・ナイ)の真の姿が明らかになることに大注目。そのうえ第3作のスペシャルサービスとして新たに中国海賊のサオ・フェン(チョウ・ユンファ)が登場し、さらにかつての海の支配者であった「女神カリブソ」という新キャラクターも登場するから、ジャック・スパロウ(ジョニー・デップ)、ウィル・ターナー(オーランド・ブルーム)、エリザベス・スワン(キーラ・ナイトレイ)の主役3人以外の物語の行方にも目が離せないことに……。

したがって、ホントにこの映画を楽しむためには、人間関係図を頭に入れておき、1つ1つの物語の意味を確認した方がいいのだが、この映画に限っては、そこまでよくわからなくても十分楽しめるようになっているので、ご安心を……。

しかして、この第3作の採点は……？ それは当然星5つ！

第3作における契約概念は……？

弁護士坂和章平が書く映画評論らしく、第1作では「ちょっと勉強、『取引』とは……」という小見出しで、「契約社会のイギリスでは、既に17世紀頃から取引という概念があったことがよく分かる」と紹介し、①ジャックとウィルとの間の「ジャックを牢から出すかわりにウィルをブラックパール号まで案内する」という契約、②バルボッサ（ジェフリー・ラッシュ）とエリザベスとの間の「バルボッサが欲しがっている金貨を渡す代わりにエリザベスを釈放する」という契約、そして③この映画に登場する海賊の「掟」を見れば、「海賊といえども契約社会の民族の一員だということがよく分かって興味深い」と評論した（『シネマルーム3』104頁参照）。

さらに第2作では、「ポイントその1—ジャックとデイヴィ・ジョーンズとの契約は……？」という小見出しで、2人の間の「ジャックがブラックパール号の船長として13年間過ごした後は、デイヴィ・ジョーンズのフライング・ダッチマン号で永遠の労役に服する」という契約がポイントであることを指摘した（『シネマルーム11』23頁参照）。このように、この『パイレーツ・オブ・カリビアン』シリーズは娯楽超大作であるばかりではなく、契約とは何かを学ぶ、法学部や法科大学院の面白い教科書となるものだった。

ところが、それが第3作では……？ 残念ながら、第3作は約束無視、契約不履行のオンパレード……？ 「力で奪え、情けは無用」がモットーのジャックが契約を無視するのは当然（？）だが、第2作ではエリザベスもジャックとの間の重大な契約を破ったし、第3作ではあのウィルさえも父親である「靴ひものビル」（ステラン・スカルスゲルド）を救出するためには約束を無視して、あらゆる手段を……。また、東インド貿易会社のベケット卿（トム・ホランダー）はイギリス紳士（？）であるにもかかわらず、大きな契約違反の決断を下すし、シンガポールに本拠地を構える海賊長のサオ・フェンも、「世界の果て（ワールド・エンド）」への航路を示す海図を切り札として、あっちについたり、こっちについたり日見主義……？

さらに、やっと開催された9人の海賊長からなる「評議会」においても、海賊長たちの意見はバラバラで、協調性ゼロ。そんな中「敵との戦闘、もしくは“パーレイ(取引)”は海賊王の務めとする」との掟が宣言されたが、さてそれを遵守する海賊長は……？

チョウ・ユンファの起用にみる、ハリウッドのアジア観は……？

この映画が大ヒットした第1の要因は、ジョニー・デップ演ずるジャック・スパロウを中心とした登場人物たちの面白いキャラ。同時にこの映画を、単なるパイレーツもの活劇ではなく、奥行き深いものにしてしているのは、北アメリカと南アメリカの間の海でキューバ島などが浮ぶカリブ海で、現実に海賊が大活躍していた16～17世紀の時代考証を踏まえて、イギリス海軍提督 vs. 海賊という対立軸を明確に設定したこと。

したがって、カリブ海を中心としたこの物語の基本線には、アジアの海賊が登場してくる余地は本来ないものだ。ところが第3作は、「ワールド・エンド」というテーマにしたため、まるで、地球は丸くなく平らだから、ずっと航海を続けていると最終的に世界の果ては滝のようになっていくという、昔の天動説のような「世界の果て」というイメージが登場した。そこで思いついたのが(?)、世界の果てに近いアジアのシンガポール……？

アジアの海賊サオ・フェン役にアジア映画のスーパースター「巫州影帝」のチョウ・ユンファを起用したのは大正解だし、パンフレットではチョウ・ユンファの、『『パイレーツ・オブ・カリビアン』という名の船に、最後のギリギリで乗船させてもらえたことは本当に幸運だ』とこの映画への出演を名誉に思っている趣旨の発言が紹介されている。しかし、私の目にはこの映画でのチョウ・ユンファの扱いは大いに不満……。だって、彼が持つ「世界の果てへの航路を示す海図」をめぐる、前半あれほど大きな役割を果たし、物語全体の帰趨に大きな影響力を与えるはずのサオ・フェンであるにもかかわらず、何と彼はフライング・ダッチマン号とブラックパール号の戦いの中で実にあっけなく死亡してしまうのだから……。

中国の大航海時代は……？

第1作の評論ではかなり詳しく『『大航海時代』の手ほどき』を書いた(『シネマルーム3』104～105頁参照)が、第3作ではシンガポールを根拠地としたアジアの海

賊サオ・フェンが登場したため、かつて中国が明の時代であった頃の、「中国の大航海時代」を少し解説しよう。

現在アメリカは中国の軍備拡張ぶりに警戒を続けているが、とりわけ、著しいのは中国の海洋戦略。既に潜水艦は次々と増強されているうえ、近い将来空母を持つのが中国の夢……？ 中国は大陸国家・内陸国家と思っていると、それは大まちがい……。

私が過去何度も大学の講義で資料として配布したのが、2005年6月25日付読売新聞の「中国『大航海時代』へ」という記事。そこには、明時代の武将、鄭和（1371～1434年頃）が1405年から1433年まで皇帝の命を受け、7度の航海を行ったことが紹介されている。すなわち、「朝貢などを求め、東南アジアからインド、アフリカ東海岸まで到達し、南海貿易の活発化をもたらした。最大で数百隻の艦隊を率い、30カ国以上（当時）に足跡を残した」とのこと。そんな「過去の栄光を再び現在に」という思惑を込めて（？）、中国政府は鄭和が出航した7月11日を「航海の日」とすると定め、鄭和の大航海出航600年にあたる2005年夏、数々の記念事業を計画し、「海洋大国」の自覚や海洋権益の確保に向けた国民意識を高めようとしている、と報じている。

こんな中国にしてみれば、『パイレーツ・オブ・カリビアン』シリーズにシンガポール海賊サオ・フェンが登場したのは大歓迎だが、あっさりとした死んでしまったことに歯ざしりをしているのでは……？ 米中友好と親善は何よりも望ましいことだが、それは建前上の話であり、その裏では軍備拡張をめぐる熾烈な駆け引きがされているのは当然。すると、今度中国がつくるパイレーツ映画はどんなテーマで、どんなスケールに……？

キーラ・ナイトレイの成長とその重用ぶりは……？

エリザベスを演ずる第1作当時19歳だったキーラ・ナイトレイは、その後『キング・アーサー』（04年）、『DOMINO』（05年）、『プライドと偏見』（05年）などに次々と出演しつつ、この『パイレーツ・オブ・カリビアン』シリーズでは徐々にその存在感を増し、1作毎に重用されていった。それは美しさとたくましさを合わせもったキーラ・ナイトレイだからこそできたこと……。それはそれでいいのだが、実はそのとばっちりを受けたのがジャックやウィルではなく、第3作のみの登場となったサオ・フェン。もっともこれは、第1作以降成長著しいキーラ・ナイトレイの重用と裏腹だ

から、仕方がないのかも……？

サオ・フェンの死亡後、サオ・フェンから船長職を引き継いだエリザベスは、以降9人の海賊長の1人として大活躍するばかりか、女神カリブソが大爆発を起こして海の中に消え、海賊たちが意気消沈する中、1人彼女だけが奮起。ここですっと船の横舷に立ち、ロープを手にした彼女が「自由な海の男たち。自由への戦い。私たちの力を連中は思い知る。皆のもの、旗を掲げよ！」と叫ぶ大演説は海賊たちの心を打ち、みんなの心を1つにまとめあげることに……。こりゃまるで、ドラクロワによって描かれたフランス革命における「民衆を導く自由の女神」の絵を彷彿させるカッコいいもの。さて、こんなエリザベスの演説に奮起した海賊たちは、エンデバー号に乗るベケット卿率いる大艦隊を相手にどんな戦いを……？

ウィルも大成長……

この映画は、「契約」の要素を大いに取り込んだパイレーツ（海賊）たちの冒険活劇ながら、そこに父と息子、父と娘との愛情というヒューマンな面も少し挿入した点がミソ……？ 父と娘の愛情は、総督令嬢であったエリザベスとその父親スワン総督（ジョナサン・プライス）との間のもので、スワン総督がカッコ良かったのは第1作だけで、第2作ではエリザベスの脱獄を手助けた後、あえなくジ・エンド。そして第3作では、姿形こそ総督姿だが既に死んでしまったあの世の人として登場。エリザベスはそんな父親とある場所で遭遇し、父親を追っていかうとするが、ホントに追って行ってしまったら大変なことになることは明らか……。そんなシーンの中、情にもろい日本人は思わずもらい泣き……？

他方、第2作でもかなりのウエイトで登場したのが、“靴ひものビル”ことビル・ターナー。ウィルの父親である彼は、かつてブラックパール号に乗り込んでいた海賊だが、バルボッサの怒りを買って、靴ひもを砲弾に縛られて海底へ沈められることに……。しかし、今はデイヴィ・ジョーンズと「血の契約」を交わし、フライング・ダッチマン号に囚われている立場だが、第3作では危機に瀕したウィルを助ける重要な役割を……。

第1作の冒頭シーンに登場したのが、海賊に襲われた船から流されてきた1人の少年ウィル。そして、エリザベスを連れたスワン総督の手によって救助された後、ポート・ロイヤルの地で刀職人として立派に成長したのがこの少年だ。ところが、バルボ

ッサ率いるブラックパール号によってポート・ロイヤルのまちが襲われてエリザベスが連れ去られたため、ジャックと共にブラックパール号を追跡することになったウィルは、第1作で大きく成長。そして第2作では、自分にパイレーツの血が流れていることを知り、ジャックとほぼ対等の地位を占めるまでに成長した。

そしてこの第3作でウィルは、当初のシンガポールの場面ではサオ・フェンに捕らわれたカッコ悪い姿で登場したものの、その後は知略に富んだ(?)大活躍を……。もっとも、ここで言う知略とは諸葛孔明や真田幸村のような知略ではなく、あくまでパイレーツとしての知略。したがって、別の言葉で言い換えれば騙し……。? そう第3作では、パイレーツたちの騙しがあっちでも、こっちでも……。? しかし、そういう騙しのテクニックを駆使しながら生き延びていく術を身につけたということは、それだけウィルが大成長したということ。その結果、第3作のラストでは、ウィルがほぼ主人公に……。?

第3作のジョニー・デップはちょっと不発……。?

この『パイレーツ・オブ・カリビアン』シリーズは、何ととってもブラックパール号のキャプテンであるジャックのキャラから生まれたものだが、そのジャックが第2作で死んでしまった以上、第3作を立ちあげるについてはその脚本づくりに苦労したのは当然……。? 本来なら、このジャックの死亡によって『パイレーツ・オブ・カリビアン』シリーズはジ・エンドになるべきところだが、ここでジャックを殺してしまっただけではもったいないという観客の気持を最大限高揚させたいうで、この第3作を公開することにしたというプロデューサー、ジェリー・ブラッカイマーの戦略はさすが……。しかしそうかといって、第2作で死んでしまったジャックを第3作でいきなり登場させるわけにいかないのは当然。

そこで第3作の冒頭は、東インド貿易会社のベケット卿による海賊への徹底した弾圧シーンからスタート。続いて、シンガポールを本拠地としたアジアの海賊長サオ・フェンを登場させて、新たに「世界の果て」というテーマを明確にさせたうえ、満を持して「死の国」で1人生活しているジャック船長を登場させることに……。しかし、「死の国」にいるジャック船長の生きザマ(?)は……。?

その姿形こそパイレーツの原形を留めているものの、その頭の中はかなり支離滅裂で、幻聴・幻覚に悩まされている様子がありあり……。? それは観客の私たちも同じ

で、孫悟空の「分身の術」のようにあっちこっちにキャプテン・ジャックの姿が登場し、ホンモノのジャックがワケのわからない精神病患者のような行動をとっていると、ちょっと唾然とすることに……？ もっとも、この「死の国」を描く物語は20分ほど……。

どのようにしてジャック船長が「死の国」から甦ってくるのかは、あなた自身の目で確認してもらいたいが、ブラックパール号に乗ったジャックはもちろん、ジャックを9人の海賊長が集う評議会に参加させるため「死の国」までわざわざ迎えにやってきたバルボッサ、ウィルそしてエリザベスたちが、無事ジャックを救出(?)した後は、それぞれいかなる行動を……？ 多分、名優ジョニー・デップにしても「死の国」での一人芝居ははじめての経験。もちろんそれなりの名演技を見せているものの、やはり私の目には少し不発気味……？ 映画後半にも、デイヴィ・ジョーンズに捕らわれたキャプテン・ジャックが再び分身たちの力を借りて(?)牢屋から脱出するシーンが登場するが、第3作全般を通じて、ジョニー・デップはちょっと不発気味と思ったのは私だけ……？

エリザベスは誰と結ばれるの……？

父親と息子、父親と娘との愛情だけではなく、この活劇映画には紅一点の美女エリザベスをめぐる恋物語も二転・三転していくから、それにも注目したいもの。総督令嬢のエリザベスの婚約者はもともとノリントン提督(ジャック・ダヴェンポート)だったが、第1作で拉致されたエリザベスは自分の名前を問われた時、とっさにターナーと名乗ってしまったところを見ると、イヤイヤ婚約者とされたノリントンよりも、ハンサムな刀職人のウィルに気があったことは明らか……？

そして、一方ではノリントンが水夫にまで落ちぶれ、他方ではウィルと共にさまざまな試練を乗り越えていく中、遂に第2作の冒頭ではウィルとエリザベスの結婚式のシーンが登場するまでに……。ところが、エリザベスの結婚にはいつもトラブルが発生するよう……？ その結婚式の場に乗り込み、ジャックを逃した罪でウィルとエリザベスを逮捕したのが、東インド貿易会社のベケット卿。そこから第2作のアドベンチャーが始まったわけだが、このおてんば娘はそんな活動の中、「自由」という点でジャックと共通の魂をもつ自分を自覚することに……。すると、大番狂わせ的にジャックとエリザベスの結婚の可能性も……？

そんなことも予想されたが、残念ながら第2作では、エリザベスの甘いキスの罠によって、ジャックは“深海の魔物”クラークンに飲み込まれてしまうことに……。第3作ではノリントンは、デイヴィ・ジョーンズの心臓をベケット卿に差し出したことによって、元の地位に復活。したがって、エリザベスはそんなノリントンとも再会することになってしまったから、恋の行方はさらに複雑に……？

他方、ウィルは今やパイレーツ色プンプンになっているが、エリザベスだってサオ・フェンの跡を継いで船長になっていたのだから、今や全く同じパイレーツ稼業同士。しかし同時に、「死の国」から甦ってきたジャック船長も健在で、相変わらずオレ流路線を貫徹中……。そんな中、完結編となる第3作で、エリザベスは一体誰と結ばれるのだろうか……？

決して席を立たないこと！

いくら冒険活劇だといっても、この映画のストーリーは第3作だけでもきわめて複雑。そのうえ第1作、第2作との連続性もあるから、トータルのストーリーをきちんと理解するのはかなり大変。したがって、映画鑑賞後は、パンフレットをじっくり読んで復習することをお勧めしたい。「ああ、オモロかったナ……」だけでも悪くはないのだが、せっかくこれだけの大作を観たのだから、その記念に何らかの形であなたなりの鑑賞メモを書いておくのもいいのでは……？

それはともかく、最近の観客は横着になり(?)、エンドロールが流れ始めるとすぐにケイタイの液晶があちこちで光り始め、周りや後ろの座席に全く配慮せず、背伸びしながら席を立つ輩も多くなっている。しかし第2作に続き、この映画ではそれは厳禁！

第3作では、上映前に「エンドロール終了後、もう一度ワンシーンが流れますので席を立たないで下さい」とアナウンスされていたから、多くの観客はそれを待っていたようだが、本来はそんなことを言われなくても最後まで観るのが映画に対するマナーというもの。第2作でもその最後のシーンは思わせぶりなものだったが、さて第3作のそれは……？ このシーンを観る限り、第3作が完結編というのは真っ赤なウソ……？

2007(平成19)年5月28日記